

# 真生

## 第七卷第一號



◇春が来た、春が来た、本當の春が。私共の心の中に、如來を中心とした春が来ました。そこには未だ罪深い雪がつもつて居ります。乍然己に如來の春の日に、其の雪を消かけてその下からは青い若芽がのびのびとはえ初めて来ました。◇このうるはしい、春の芽生えは、やがては花とも實ともなりませう。暖い春の日に私の心の奥には、限り無い喜びの春が来ました。ごこの山にもごこのさにも春が来ましたやうに春が来ました。

◇ひな鳥の親よぶ聲、私共はたゞひたすらに佛の御名を呼ぶのであります。さり乍ら、此のよぶ聲は限りなく親呼ぶこゝろ、そこには限りなき喜びの心が湧れてゐます。

◇雨の降る日も、風の吹く日も、はたまた雪の日に、親鳥の羽の下に、ヒナ鳥のやすらぐ如く、御名よぶ聲も、喜びの聲、母よぶ聲もふところのなか。ミオヤは獨り我をつゝむ

◇そこには限りなき春の光が、もう若芽を毎日育て、ゐます。春が来ました、春が来ました。オー我がなつかしい春が来ました。このあた、かい春の光に、雪の下なる芽は育つて行きます。

◇そこには限りない、生長の光りが輝く、春の日のうら、かさ、限りなき慈悲の光り、友よ新春の光を迎えさせう。(念)



# 我が心が祀れ

□私はこの貧民窟に住むやうになつてからもう八年になりますが、其間ジトとよく周囲の人々を見てみると、一頃は非常によく働いて眞面目に内をやつてゐた人が、此頃はすっかり放埒となり墮落して了つたのがあるし、又一頃はナラズ者で何とも手の付けやうもなかつたのが、近頃は見違へる程良い人間になつてセッセと働いてゐるものもあります。

□一村でも一町内でも十年と續いて隆盛にやつてる店は少いものです。金光教の教祖様が「三年三年又三年、十年續いて喜べたら我心を祀れ」と云はれたさうだが、本當に信仰の上にも十年變らず、一つ道を求め續けてゐる人がどれ程あるでせう。

□かと云ふてた、年限を永く續けて居れば、それで良いと云ふのはありません。「我乍ら我心を祀れ！」何といふ尊い信境でせう。信仰してゆくことに困つて、いつとはなしに自分ながら自分でない、驚く程の「自分」にして戴いて、我れ乍ら其「我れ」に頭が下がり、其「我れ」に祭り仕へれるのでなくては、本當の信仰ではありません。

□此の我れは、如來さまが我れになつて下さつた「我れ」で、思はず信の道には勇み出る「我れ」です。そしていつとはなしに段々見榮張つたことや、慾ばつたことを嫌つて、眞實の道に、眞實に生きたいと努力する「我れ」です。

□あ、どうしてこんな「我れ」になつて下さつたか、自分ながら自分に對して掌が合さる此の悦びほど大きい歡びがあるでせうか、又これはほど大なる尊嚴があるでせうか。

□釋尊が南無佛！と、阿彌陀佛に歸敬せられたのも、同時に首を擧げて「我れ成道せり」と説破せられたのも、此の「我れ」に對してです。この「我れ」この「自己」この「如來さま」を常に自己の上に拜んでゆきたいものです。(尅子)

## 目次

我が心を祀れ	尅子
回心の阿闍世	土屋觀道
眞生製陶所	
御殿場大乗寺 三昧會感想	
に於ける	藤井貞邦
吾朋便り	
三昧會案内	
新年祝賀	

▽正月が來たと云ふて門松を建て、師走が來たと云ふて借金取りに廻ります。夏が來たとて浴衣の用意をし、冬が來たとて炬燵を張る。恰度子供が腹のへるのを忘れて、夢中になつて土なぶりをしてゐるやうに、金なぶり、家なぶりをしてゐる内に、自分の生命が刻々にへつて居り、氣がついた時は腰も立たぬやうな始末です。

▽私は壽命が欲しいと思ひません、而し爲すこと無うして暮れてゆく自分が惜しいのです。時間が惜しいのではなく、自分自身の値打ちを造れぬことが惜しいのです。

▽かと云ふて天下を駭かす程の事が出来ぬから殘念だと云ふのもありません。天下になんか名が出て出ぬでもどうでもよろしい、たゞ我が功德の増上をのみ望まれます。「名聲十方に超わん」といふのは此意味ではないかと思はれます。

▽それは乞食に一錢やるのも功德なら、やらぬのも功德です。大根一本買ふのも功德なら買はぬのも功德です。本當の功德中の功德とは何でせう。

▽それは佛法を明らめ、佛道に合するといふことです。佛道とは何か、佛心を戴くといふことです。佛心を戴くは何か、自己の我見の垣根を排らつて生味の自己になるといふ事です。蜜柑の皮をむいたやうにツルリと皮脱ぐといふことです。皮をぬいた上で一錢遣るのなら、遣るのも功德なら貰ふのも功德です。皮を被つた上でやるのなら、贈るのも虚假なら貰ふのも慾です。たゞ眞實心、眞實心にならして戴くことが眞の功德でした。本當に功德を積んで行きたいものです。(尅子)

# 回心の阿闍世

土屋觀道

## 一、貧者一燈

貧者の一燈、長者の万燈、といふことは少しく佛教の話聞いた人ならば、誰でもが皆よく知つてゐる所のものでありませう。而も、其の話が長者の万燈が貧者の一燈に如かないのはそこに佛にさぐる至誠の足らないによることも、之亦多くの人々のよく知つてゐるところであります。然乍ら、此の故事の出でいる經典が其の實は此の貧者の一燈を中心として書かれたものでなく、反て長者阿闍世の回心を中心として書かれてあることは、之を知る人があまりないやうに思へます。

もとより貧者の一燈が長者の万燈に勝ると云ふことを、其の至誠の點に於て、之を賞揚することは結構なことではありますが、長者の回心、阿闍世の轉向を深く反省して、私共の學びとすることは更に尊いあるものゝあることを私には感せずには居れぬのであります。そこで、今私は此のことに就て、いさゝか私の此の阿闍世の回心を拜讀した、其の一端を述べて見ることに一層切なるものを覺えたのであります。今其の經典の大意を挙げますれば、

## 二、經典の大意

一時、佛が羅閱祇國の耆闍崛山中に在りました。時に、阿闍世王が佛を請じて、佛は飯食し已て、祇園精舎に歸へられました。王が其のあとで祇婆と議していはれるには、「今日佛を請じて、佛は飯食し已られたが、更に復たよいことがあるか。」

祇婆「さればで御ざいます。それは思ふに燈を多く燃すことでせう。」

そこで王は之を命じて、百斛の麻油膏を具へしめ、宮門から祇園精舎にまで至らしめました。

時に、貧窮な老母が在りました。彼はいつも至心があつて佛を供養したいと思つてはいるのですが、資財がありません。然に今此の王の盛大な功德の行を見まして大に感激し、自自行乞して兩錢を得、之で麻油膏を買いました。膏主が云ひますには、

「老母よ、おまへは大へんな貧窮でないか。それに今兩錢を乞ひ得て、何故に食物を買はないで、そんな膏などを求むるのか。」

老母「私の聞くところでは、此の世に於て、佛に遇ふと云ふことは甚だむづかしいことだとき、ます百劫にたゞ一度だと申しますのに、今私は幸にも佛の在世に逢ふています。然に之に供養する何ものもありません。今日王様のあの大へんな燃燈の供養を見て私は大いに感じました。そこで、實際貧窮な者ではありますけれども、此の一燈を以て後世の根本功德としやうとするのであります。」と。

膏主は之を聞きまして、大いに感じ、兩錢に對しては二合の膏しかないのであります。更に三合の膏を益して凡そ五合として彼に與へました。老母は非常に喜んで佛前に行き、之を燃して、心に念じますには、「此の膏は半夕にも足らない」と。そこで自ら誓つて申しますには「若し私が後世道を得ること佛の如くでありますならば、此の膏は夕を通じて尙消えないであります。」と。かくて老母は佛を禮して去りました。

然に、王の燃した燈は或は滅し、或は膏がつきて、常侍の人があるのに完全でなく、唯一つ老母の燈のみが朗で、殊に他の諸燈に勝れて夕を通じて滅せず、膏も亦つきず、翌朝にまで及びました。老母は復來て地面に頭をつけて禮を作して去りました。

佛が目蓮に云はれますには、

「天も已に曉けた、諸燈を滅せ」と。

そこで、目蓮が其の通りに、諸燈を滅しましたが、諸燈は皆已に滅びましたのに、老母の燈のみは三度滅して尙滅しませんでした。そこで目蓮が袈裟で扇いで滅しましたが、燈火は益々盛んにもえて明るくなりました。目蓮は更に威神力を以て隨藍風を引き起して、之を吹き滅さうとしましたが、老母の燈は更に盛猛にして、上は天梵を照し傍ら三千世界を照して、悉く其の光が見れました。

佛が目蓮に云はれるには、

「よせ、よせ、之は當來佛の光明功德である。汝の威神力で滅せるものでない。老母は宿世に百八十億佛を供養し己つて、前佛より決を受けている。經法を教授し、人民を開化することに務めて、自らの檀を修するに暇がないので、今日貧窮にして財寶が無いのだ。これから三十劫を経て、功德成満して、まさに佛となる。號して須彌燈光如來と名づける。至眞の世界には日月がないが、人民の身中に皆大光があつて宮室の衆寶、光明相照して切利天上のやうである」と。

老母は此の決を聞きまして、非常に歡喜し、即時に身も軽く虚空に昇り、地を去ること百八十丈、來り下て頭面作禮して去りました。

王は此のことを聞かれて、祇婆に問ふていはれるには、

王「我功德を作すこと魏々としてかくの如くであるのに。佛は我に決を授與せず、此の老母は一燈を燃すに決を受くるのは何を以てであるか」と。

祇婆「王の作し玉ふ所は多いけれども、其の御心が專一でありません。だから此の老母の心を佛に注ぐには及びません」と。

そこで更に往いて、佛を請じ、今度は諸園の監に勅して、晨朝早く好華を採つて、宮中に送らしめました。

佛は晨朝に祇洹を出でられ、ゆるくと、道路に人の爲めに法を説いて、日中をすぎて宮に至られました。

時に、一園監なるものがありまして、華を持って適ま園巻を出で、丁度佛と大道の衢の所で會いました。佛の説經を聞いて非常に歡喜し、其の持っていた華の悉くを、佛の上に散してしまいました。すると、便ち華は皆空中に住して、佛の頭に當りました。——(記曰く之は受決のしるしであります)——

佛は之に決を授けて、

「汝は已に九十億佛を供養した。今後百四十劫をへて佛となるであらう。號して覺華如來と云ふ」と。

其の人は大に歡喜して、即時に身も軽く虚空に昇り、來り下て佛を禮しました。そして自分で思ひますには、「我が王は人となり性急にして、又嚴である、故に私に命じて、齋戒して華を持って之を佛に供養しやうとせらるゝのに、私はそれを悉く自分で佛に上てしまつた。此のまゝ、空手で王の所に往くならば、王はきつと私を殺し玉ふであらう」と。

そこで家に歸つて、空の華箱を戶外に置いて、内に入り婦に告て云ひますには、

歸「自分は今朝からまだ食事をしていない。王様は私を殺すに急である。だから早く食事の用意をしてくれ」と。

婦はこのことを聞いて、非常に惶れ驚いて云いますには、

「何の故に殺すのですか」と。

そこで、彼は婦の爲めに其の事の次第を説いて聞かせました。そこで、婦は外に出で竈の下に至つて

食事の用意をしました。そのとき天帝釋が天華を以て空箱を満しました。婦は食を持つて還りますと、戸の外の箱の中に華が一パイ故のやうに満ちて、其の光澤の美しいことが普通のものではないのを見ました。そこで之を夫に告げました。夫は之を見て、之は天華であるぞ知りました。

そこで非常に喜んで、彼は復食事も止めて、華を持つて宮中に入りました。時に王が適ま出て佛を迎えるのに、道に王と逢ひました。王は華の大へん立派であつて、世間にあまりないのを見て、監に問て曰はれますには、

王「我が園中にもこんな好い華があるのか、而に、汝は未だ一度も之を送上しない。此の罪正に汝の死に當るを知らないか」と。

監「大王よ、園中には此の華はありません、私は朝早く、園華を持つて出ましたところ、道路に佛の説經に逢ひまして、歡びに勝ねず、盡く之を佛に上てしまいました。然に佛は私に決を授けて下さいました。罪は正に殺に當ることを知つてます。然に家に歸つて食を求めます頃、恰も空箱を見ますと、復此の華が見えました。之は必ず天華であります。園のものではありません。今私は身卑賤に生れ、王の爲めに園を守り、役目に拘制されて行道を得ませんが、一び已に授決しましたからには、若し死んでも必ず天上に生じ、十方佛の前に拘制せられる所なく、意の姿に行道することが出来るであります。だから王が若し私を殺されましたも、少しも私は怪しむところはあります。」

王はこの授決を聞いて便ち慚怖を生じ、肅然として、毛を豎て、即ち起て禮を作し、長跪し懺悔されました。

佛は宮に至り飯食し已つて、呪願して去られました。王は又祇婆に問ふていはれるには、

王「我前に佛を請して、老母決を受け、今日福を設けて園監又決を受く、我獨り何の故に初より所獲

がないのであるか、非常に心配である。之からは復どんな功德をしたならばよろしいのか」

祇婆曰「王は毎日のやうに福を設けなさいますけれども、たゞ國藏の財をお用ひになり、又人民の力を御使いになるのみで、御心は或はたかぶり或は瞋恚でみなされ玉ふ、故に未だ決を受け玉はぬのであります。之からは宜しく御自身への供物を減じ、瓔珞七寶の珠環を脱し、以て寶華を作り、夫人太子と力を併せて合掌し、自らつとめて之を一心に佛に上りたまへ。若し佛が王の至誠を照覽し玉は、必ず決を得ることでありませう」と。

茲に於て、王は厨膳を減損し、晝夜齋戒して、身上の諸寶を脱し、諸師を合聚して目前に華を作り、王及夫人太子も皆自ら手を著けられ。九十日にして、万事調いました。そこで嚴に駕を命じて、佛處に往て之を献じやうとされました。

時に傍臣が告げて申しますには、

「聞く、佛前に鳩夷那竭國に到り玉ふて、已に般泥洹し玉ふ」と。

王は之を聞かれて、非常に悲しまれ、涙を流して曰はれるには、

「我は故に至心を以て手づから此の華を作つたのだ、だから佛がよし般泥洹し玉ふども、我は往つて耆闍崛山に詣で、以て佛に上つて、坐處に展馳するは我意である」と。

祇婆「佛には身も無く、亦泥洹もありません。亦常住もなければ、滅もなく在もありません。たゞ至心の者のみ佛を見ると申します。佛世間に在しても、至心なき者は佛を見ることができません。だから大王にして、至誠に申しますこと、今のやうであらせませうならば、佛が般泥洹し玉ふと雖も、往き玉へ、必ず佛を見たとまつることでありませう」と。

便ち耆闍崛山中に至つて、佛を見たとまつり、且つ悲み、且つ喜び、涙を垂して進み、頭面作禮して

七寶の華を以て佛上に散じ玉ふたのであります。然に華は皆空中に住して、化して寶蓋となり、正しく佛の頭上に當りました。

佛は即ち王に決を授けて申されるには、  
「却後八万劫、劫を喜觀と名く、王當に佛たるべし、其の佛を淨其所部如來と號したてまつる。其の上を華王と名け、時の人民壽四十小劫であります」と。

阿闍世王の太子を栴陀和利と名つけ、時に八歳でありました。父の決を授けられて大いに歡ぶのを見て、自分に身上の衆寶を脱し、佛上に散していはれるには、

「願くば、淨其所部作佛の時、私も亦金輪聖王と作つて、佛を供養することを得たい、而て、佛般泥洹の後は私も亦其の後を續いて佛と作り、其の散する所の寶は化して交露の帳となり、正しく佛上を覆はん。」

佛「必ず汝の願いの如く、王佛たるの時、汝必ず當に金輪聖王となるであらう。壽終らば上で兜率天上に生じ、壽盡きて便ち下て作佛する。藥王の刹土にあつて、教授し、佛を栴檀と號し、人民の壽命國土のすべてが、皆淨其所部の如くであります」と。

佛が時に、決を授け竟り玉ひ、王及栴陀和利が前で佛の爲めに禮をなしますのに、便ち燦然として、佛の在す所が見えずなりました。

### 三、阿闍世の回心

以上は經典の大意といふよりも、寧ろ阿闍世王授決經の現代譯と云つてもよいです。然に此の中できが最も注意して見るべきかと云つたなら、主として阿闍世の回心にあることはもとよりであります。然に今までの多くの人々はあまりに阿闍世の回心を云はずして、反て貧者の一燈のみを云ひ傳へてゐるかに思えますのはどうしたことせう。

一 体貧者の一燈も園監の献華も阿闍世の轉心を述ぶる一前提に過ぎません。然し貧者の一燈に於て、私共の彼女に學ぶことの多いのも亦事實であります。殊に老母が佛を敬い貧窮の中から佛に供養し、行乞以て膏を求めると云ふ点は少しでも物持つ者の大いに反省せしめられる所であります。尙膏主が老母に感じて膏三合を益したのも善根を喜ぶ清い行爲に相變りありません。中にも老母燃燈の精神、即ち此の膏は半夕に足らずと知つて、「若我後世道を得て佛の如くならば此の膏通夕尙滅せざるべし」との誓言の如き、此の心を示すものであります。而も、王燈皆滅し、油又盡きるに老母の一燈のみは尙滅せず、明朝互に至つて目蓮三度滅して尙滅せず、世尊「止めよ止めよ、之れ當來佛の光明功德である」と賞揚せらるゝところ、全く世界の大文學であります。又これ老母の佛心の光であります。

乍然尙王が其の理由を知らないで「我は福を起すことかくの如くなるに佛は決を我に授けず、老母は一燈を燃して、決を受けるとは何を以ての故であるか」と問ねたのは寧ろ同情に値し、靜に考へれば此の心は亦そのまゝ、私共の心でもあるやうです。即ち祇婆も後に云つておりますやうに、私たちはともすれば自らの力で之を爲さず、多くは人の力で用を爲して、其の効のみを自分のものにしやうとするので無いでせうか世の中で自分の身、自分の財と云ふものが、果してただけありません。而も亦之を使ふに我力と思ひ、人を使ふに又我使ふと思ふのは、恰も王が國藏の財を用い、人民の力を使つて之を自分が爲すと思ふのとだけ選ぶところがありませう。然に佛陀は此のことを祇婆の言葉で我等に教へて在すのであります。「富者が天國に入るより、象が針の穴を通るが易い」とキリストが戒められたが、之は共に金持の反省すべきところでせう。

### 四、阿闍世の精進

乍然、王がそれにもかゝらず、すなはに祇婆の教へに従つて、其の道につき玉ふことはさすがに感ずべきことの甚だ多いのを見るのであります。

即ち王は園監の受決を聞いて、「懺悔を生じ、肅然として毛髮も、即ち起て作禮し、長跪懺悔」せられたとあります。王の懺悔は亦私共の懺悔であらねばなりません。然に私共は此の王の懺悔に比してどれだけの眞の懺悔が有らませう。之を思へば私共は更に一層の懺悔であります。諸者よ、私はさきには老母の一燈によつて、自分の貪慾の心を照されました、然に今はまた阿闍世の純心によつて、自分の慢心を照されてゐる心地がします。

經典の記者は「茲に於て、王は食膳を減らして、晝夜齋戒し、身上の諸寶を脱して之を以て華を作り王及夫人太子皆自ら巧勤して著手す」と云つておりますが、果して私たちは之に比べて、どれだけのことをしてゐませう。今にして思へば「天万乗の君として、又實に其の至心を致す」と云ふべきであります。

而て、王が佛が般泥洹を聞かれた時の悲みはどうであつたか。涕淚哽咽してとありますから、非常ななげきでありましたらう。即ち「我故に至心手づから此の華を作る佛般泥洹すと雖も、我は耆闍崛山に詣で、之を佛の坐處に上らん」と。いかにもさうこそあらうと共に泣かざるを得ないものがあります。

而て又、之に對する祇婆の言も亦實に千古の金言であることを覺えます。即ち「佛には身もなく、亦泥洹もない」と只今佛の般泥洹を聞き乍ら之を否定し、更に「亦佛は常住ならず、滅なく在無し」と示して、「唯至心の者のみ佛を見、無至心の者は佛此の世に在るも之を見ず」と云つて、而も「大王よ、至誠なることいましてからば、往け、必ず佛を見たてまつらん」と。即ち祇婆も亦王の至誠に感じて此の言を發してゐるのであります。王の至誠は今や祇婆の心にも叶つたのであります。恐くはまた讀者の心

にも叶つたことでありませう。即ちそれは又御佛の心にも叶つたからであります。而て、王は遂に嚴にも命じて、耆闍崛山に往かれ、而て佛に見ることを得られたのであります。

「王佛を見て、且悲み、且喜び、垂涙して進み、頭面作禮して、七寶の華を以て、前んで佛の上に散す。華は空中に住して、化し寶蓋と成り、佛の頭上に當る」と經典の記者は當時の光景をかう言つて居ります。實に佛を見たてまつりし王の喜びよ、「且つ悲しみ且つ喜ぶ」とほんどうにさうでありましたらう。「垂涙して進み、頭面作禮して、七寶の華を以て佛の上に散す」とある。之も亦王の心の純眞なる何ものか之に加んやであります。「華が空中に住して、佛上に當る」とは即ち佛の授決の前兆であります。

若し華を散する人の心が眼に見ゆるものならばそれこそ正にしかあるべきは當然のことであります。茲に於て、王は即ち佛の決を得ましたが、此の喜びを見た太子の梅陀和利も亦自ら發願して、其の決を受けました。之れも亦目出たしと云ふべきであります。

#### 五、諸者の心

乍然、こゝに一つの問題は、かく云ふ私共の受決は一体どうなることでありませう。靜に之を考ゆれば凡そ佛敎の生命は人のことではなくして、其の一切が自分のこと、なることであります。釋尊己に泥洹して、今を去ること二千五百年となりましたが、至心の者は今の尙ほ佛を見ることができるのであります。然に無至心の者は之を見ることができません。昔も今も佛は常住に在しますものを、私共は果して眞に佛を見やうとしてゐるでありませうか。ともすれば、過ぎてあどなき肉慾の奴隸となり、或は徒に金錢や名譽に執着して又と歸らぬ尊き人生の一生を日夜無意義に消費しやうとしてゐるではありませんまいか。

友よ、人生は決して、一時の戯ではありません。眞に私共は之より眞生の事實に目醒めて、再び來ら

ぬ此の尊き人生を眞に生かさうではありますまいか。私は今此の阿闍世の轉心を見るにつけて、如何に彼れが純眞に歸り、眞實の生命に生きたかと思ふて、轉々たる其の尊嚴を感せずにはゐられないものがあります。(二、二二、一九、夜二時——全二〇)

### 眞生製陶所の近況

右四日市製陶所は眞生主義のもとに、中野新兵衛氏經營にかゝるものでありますが、氏逝いて己に五年、先月十二日は第一期發展祝賀會が開かれました。工場も愈々工場旗が出来、中野、服部、岸等の道友が其の幹部となつて一大發展を來しております。左の工場主意書は新兵衛氏の物故前一月病床の中から物せられたものであります。若し之に類る社會活動の同志の中に參考にしたいだけば何よりです。

(觀道)

### 眞生製陶所工場主意

我が製陶は普通製陶の如く營利を目的とするに非ず主人は勿論同所員一同に至る迄人格の養生を目的とし實地修養實驗をなすには種々なる經費を要するが爲此に經營し經費を得んとすれば也之の故を以て我が製陶を眞生製陶所と名付け其の目的とするは其の本尊を佛陀

とし我々人生の最大目的たる永遠の生命と無限の向上を得せしめ給ふ事を祈るにあり其の方法等は光明主義に明か也若し之なくば巨億の富名譽地位何かせん如何に貧なりと云へ共社會的悲境なれ共是ある者は勝利者也佛子に位するが故力と光とを以て生活し得らるゝこと明か也所員の待遇は信仰高き即ち人格高きを第一とし技術を第二として標準を定め給料又是に準ず可し若し第一の心なく是に至らんと欲する心あるものは大いに實地修養にあたる可しかるが故に經營は安全を第一とし利に走るが如きことある可からず只眞にして與へられたるものにて満足し各自特性を發揮せられんことを所員一同に望む

大正十三年六月

中野新兵衛

### 御殿場大乘寺に於ける三昧會感想

藤井貞邦

南無阿彌陀佛。左に日記の一節を認めて今日の御別事に懇切なる御引導を給はつた御禮に代へます。合掌

今回の御別時は嘗て土屋上人と自分との關係に於て特殊の御縁を結んで頂いた思出の深い場所ではあり又今夏は身体の弱い我が家内と共に永らく御厄介に成つた場所ではあり先第一に懐かしい氣分に満たされて居た。それに加へて過去一ケ年間に私の心の上についた波瀾が手傳つた爲であらうか。兎も角も信仰の上へへの進境を見た。それは御上人に伺つて見るまでも無い正し方向の歩みであることを自知する。波瀾といふのは昨年の秋から兄弟の中で最親しかつた弟が北海道での重病。危篤。學校を休んで看護に赴いたこと。續いて其死。だんく、襲つて来る寂しさ。そして其後に來たのが体裁のよい免職であつた。教員といふ仕事の外には何等の経験も自信もない自分は是から何をしようといふ心も起きないで全くあてのない謂は、家庭にありながらの放浪生活を送ること茲に一ヶ月半。で自分は「これから、うんと念佛に没頭して其中から生れて来る念願に進まう」と思つて居た。そこへ丁度中村上人の發願に神谷上人の賛同で成立つた今回の御別

### 吾朋便り

□東京 土屋觀道

皆様には御變りも在らせませんか。此の御便りが皆様の御手に渡ります頃には、皆様はもう新春の輝きに限りなき慈光をゆたかに浴びてゐられる時でせう。願くば今年も舊年に倍して眞生の道にいそしみ度存じます。靜に思へば近年に於ける日本の發展は史上にもまれに見る一大發展であります。又一面には思想上にも經濟上にも最も大切な一大轉回期をなして居る時でありますれば此際お互に一層の注意を要すべき時かと存じます。何事も初めから完全なものとはありません。願はたゞ完成に近づくべく努力あるのみと存じます。やれば必ず大がいのことはやれるもの、是非共俱に今年も亦一歩進んで革新の第一義に立ちませう。新年の祝賀に乗て一言御願申します。例年の通り今年も亦年賀の返禮を欠きませんから之で御許し下さいませ。

□愛知縣田原町 山田マサ子様より

御上人様日増しに寒さが加はつて参りました。お一家の皆様方には御健かに居らせられますか、毎日楽しんで待つて居ました。眞

時である。私は中村上人から御通知を受けた時大に喜んで直に申込んだのはあるが扨愈々家を出掛ける前日頃から妙に寂しく苦しかつた。それは「此奴またいつもの通り不成績で歸るに決つて居る」といふ思ひであつた。こんな氣分が私を支配してか汽車の中でも旅愁とでもいふのか何といふ事もなく寂しい涕ぐましい氣分がしてならなかつた。然し此等の事は總て私に良いものであつた事が今になつて味はれる。今や恩寵によつてほんの少しばかりではあるが進境を見せて頂いた事は此上もない喜びである。しかし夫は「天に踊り地に躍る」といふやうな喜びではなくしてまことに静かな幽かな喜びである。際立つた、けばくしい氣分では少しもない。御上人に對し御同行に對し敬愛といふ氣分もわかる。此味は恐らく念佛生活に入れる人へのみわかる事かも知れない。少くとも私にはさうだ。世間では敬といふと屈服萎縮といふやうな氣分に縛られる。愛といふと玩弄獨占といふやうな心持に囚はれる。眞の敬と愛とをつき交せた氣分といふものは何とも云へない良いものである。此等の氣分が味はれるといふことは如何にも嬉しい事には違ひないが併し味はれぬでも構はない。なせならそれは唯南無阿彌陀佛の幼稚園を卒業したといふ唯一枚の免狀のやうなものだといふ氣がするからである。この免狀ばかりあてにするると大間違ひが起る。どうぞ如來よ。免狀に腰掛けて了ふやうな

私だつたら免狀を下さいますな。免狀が貰へなかつたら進む氣が出なくなる様な私だつたら免狀を下さい。下さるにしても小さなものをチヨイ／＼下さらうと溜めて置いて大なるものを一度に下さらうと本當に私の進ませて頂き易い様に願ひます。十七日の夜茶話會の時私は「少しばかり歸命の心がかつた。緊張とゆつたり大なる者を私は見た。今尙明かに見て居る。それについて少し以前前の事から書いて行きたい。一つの坐談であつたか同行の中から辨榮上人の話が出た時土屋上人が「辨榮上人の偉大さの現はれるのは是からです。今後數十年の後でせう」と言はれた事があつた馬鹿な私はその言葉を獨り變な解釋をして済して居た「ハ、ア近年まで生存して居た人でも矢張り埋れた事蹟や逸話がそんなに澤山あるものかなア。それが歴史家の穿鑿によつて甲の日記乙の日記録等の中から現はれて來るのかなア」と思つて居たのであつた然るに今回始めて生きた辨榮上人を見た。しかも現に御修業最中であることを見た。それと共に「釋迦も彌勒も御修行最中」といふ言葉が新しい意味を以て思ひ出されると同時に夫が明かに見えた。之こそは誰が何と云つたとして幻影ではない。私の存在が確實であるのと同様な確實さである。單なる主觀の幻影ではない。肉眼と心眼とを以て確かに見た。「成程々々隠れたる事實まだ世に

生本日戴きました。ほんさうに有りがたう存じます。

御なつかし先生から直接にお話して戴く心持で只今熱心に云うより半ば夢中で幾度も讀まして戴きました「茶毘の釋迦」ほんさうに深く考へさせられます。もつこ／＼靜かに幾度も心行く迄味はつて見ます。今宵は燒津町の光心寺に居らつしやいます。今頃は御熱心にお話して見ゆる事と思ひ、たまらなく御懐かしく存じますと同時に先月の修養會の折の事がはつきりと頭に浮んでまゐります。先生の唱へられる御唱名によつて私は深く／＼お念佛の尊さありがたさを教へられました。

何んとも申し様もない程の喜びでございます。又宗教と云ふ事に付いても今迄私が考へ又信じて來た事と先生の御話とがピッタリ合つた事も大きな喜びです。そして心の奥底に／＼とつかりました信念が出來ました。

衷心より感謝致します。會の最後の日二十七日にはどうしてもあのまゝ御別れるのが惜しくつて、終に不作法な失禮なまかへり見ず御居間へお邪魔さして戴きました。

五日の間眞心こめて御熱心に御話し下さい

まして、ほんさうに何んとも名狀し難い程の喜びと感謝に満された私……先生に一言の御禮も申すには去り難く又一には修養のつませられた御人格のすれ給ふ先生の暖かな御心に接しても一度感化を受けたかつたのでございます。

何んのへだても無く色々々御親切にお話し下さいます先生の暖かな御心ほんさうにお母様と申上げたい迄に思はれました。そして眞生を拜見させて戴く期會を得まして喜びの喜びでございます。其のうち弟の元へさげましたら、きつこ／＼大喜びしてくれました。

先生今晚も亦夕食後眞生を靜かな心で拜見さして戴きました。巻頭にお示し下さいました様に日本晴の様な（心のうちが）スツキリカラリと一點の曇りもない清き如來様始め天地のすべてのものに恥かしくない美しさほんさうにそうなりたいたいでございます。

日に新日々にあらたに改めん  
淨き光りに照さる、身は

右の御歌を胸に抱いてわする、事なく、毎朝御念佛申しつて、床をばなれ強くやさしくそして眞心をもつて、すべての事にあたるべく努力して居ます。

出ない事實が澤山ある。しかしそれは日記や記録の中に埋れて居るのではなかつた。成程辨榮上人の偉大さは是から現はれるのだ何といふ莊嚴な光景であらう」と感じた。併し又一方には穿鑿的方法によつて辨榮上人の偉大さを現はさうとする人もあらう。之も結構な事ではある。しかし此手段が若しも太鼓叩く擔ぎ屋の手にか、つたら大變である。近い話が日蓮上人である。其傳記や遺文集の中に大分疑はしい雜物が混入して居ると聞いて居る。之が擔ぎ屋の仕事だ。自分の妄想から捏造した幻影を日蓮上人になり付けさうして人に拜ませて自分が偉大になつたつもりで居るのだ。いは、上人に糞を食はせ泥を塗つて殺して居るのだ。之と同様に御修行最中の辨榮上人に向つてこんな事をして居るものはないか。全く無いとは斷言出来ない。釋迦を殺し彌勒を殺すといふ事と自己を殺すといふ事とは全く同一の事實だ。これ程深き罪が他にあるであらうか。それから見ると過去の過去とか念佛中に妄想が起るとか云ふ事はまだくやましい各愛い淺ましきだ。かう考へて來る時、人々に對し事件に對し其真相が今現に見われないで居るといふ事こそは罪の最深いものではないか。かゝる意味に於て善導大師の深心の解釋がしつくりと味はれ出して來た。しかしまだく極めて淺い淡い感じである。どうぞ如來よ。恩寵によつて茲を育て給はんことを。南無阿彌陀佛。

今宵は何時になく風がないで靜かな夜でございます。父は用事があつて外出して未だ歸りません。可愛い弟達は楽しい夢路をたどつて居ます。御近所の人々ももう休まれたのか物音一つも致しません。私は獨り電燈の下でお懐かしい先生の面影を心に浮べ乍らほんまうに下手なお恥かしい字で書きました。けれども一生懸命で真心こめて書きました。私は如來様の暖かな御むねに抱かれて、毎日苦しい事にも打勝つて楽しい感謝の日を送ります。來月も亦眞生を通じて先生の御話を伺うのをお待ちして居ります。

□神戸高商内 安部新様より  
夜半人なき處に行つて念佛する心、これこそ眞の宗教心であり、御佛の心に叶ふ念佛でありませう。赤裸々に全人格を御佛の前に投げ出して祈り求むる所に、吾等の情意の淨化が行はれませう。然し私共はこの人なき處で念佛する事があまりに少ないのであります。この念佛の心が燃えて來ますなら自然私共の日常生活がこれによつて律せられて來る様になる筈だと思ます。上人の御教に従つて人なき處に念佛する心に燃えたいと思ます。

謹で新年を賀し奉る

全國眞生同盟一同

- 眞生同盟 東京支部 一同
- 清水支部 一同
- 名古屋支部 一同
- 大阪支部 一同
- 尼ヶ崎支部 一同
- 越後柏崎光明眞生會
- 見附光明眞生會
- 岐阜市 光明會
- 大垣光明眞生會
- 愛知縣佐屋光明眞生會
- 三重縣津市光明眞生會
- 名古屋市光明眞生會
- 名古屋向上婦人會
- 神奈川縣浦賀光明會
- 群馬縣高崎光明會
- 高松高商佛教青年會
- 静岡縣燒津光明眞生會

愛知縣舉母光明眞生會

- 東京 堤 清六
  - 小倉 彦六
  - 小要利 吉
  - 神谷善之進
  - 谷口年泰
  - 谷口春佐都
  - 内海健郎
  - 山崎作藏
  - 眞福寺
  - 上阪伊之助
  - 藤井專三
  - 中野久藏
  - 鈴木與平
  - 栗生來治
  - 久我尾正治
  - 黒宮平八
  - 瀧澤愚佛
  - 高羽直
  - 本田壽江
  - 渡邊善兵衛
  - 尾上銀子
  - 崇徳寺
  - 尼ヶ崎
- 岐阜市
  - 大垣市
  - 高須町
  - 山崎
  - 四日市
  - 津市
  - 大坂市
  - 眞生製陶所一同
  - 阿部喜兵衛
  - 佐々木高子
  - 長圓寺
  - 大寶寺
  - 眞松院
  - 豊田省三
  - 曾我尾昌治
  - 奥村善次郎
  - 野田三郎
  - 米田傳司
  - 橋本政一
  - 圓平寺

神戶市 極樂寺  
 關浦恒子  
 鶴田省三  
 藤村よれ  
 藤健三  
 原吉郎  
 波邊入右工門  
 越後柏崎

全見付  
 全小國  
 岩下祥兒  
 桑野喜太郎  
 波邊三十郎  
 會田証  
 小熊啓太郎  
 今井善吉  
 山岸鶴郎

◎觀道旅行日程表

一月六日より七日間  
 同 十三日夜 清水 實相寺  
 同 十四日 大垣市  
 同 十五日 大垣 圓通寺  
 同 十六、七日 本巢 栗野氏方  
 同 十八日 大坂市  
 同 十九日 尼ヶ崎 圓平寺  
 同 廿一日 神戶市  
 同 廿二日 名古屋 崇徳寺  
 同 廿三日 堀榮二氏方

眞生社編輯同人  
 土屋觀道 大橋俊高  
 中村康 大野顯道  
 山口照康 神谷周隆  
 中山善英 中村康隆  
 土屋美和子  
 佐藤忠義  
 百々治之助

◎清水實相寺三昧會案内

時 一月六日より 七日間  
 所 静岡縣清水港實相寺内  
 東海道線江尻驛下車、乗合自動車  
 金拾五錢

師 土屋觀道師

今年は一同ミツシリと念佛中心の集りを致し度願います。非常に暖温の地ではあります。毛布其他の御用意は例年の通りに願います。

清水實相寺 中

定價 一部十錢 半年六十錢 一年一圓  
 振替口座東京四七二八八番 眞生社  
 東京市芝區芝公園第十四號地九番  
 編輯兼 土屋觀道  
 發行人 眞生  
 名古屋市東區東外堀町二ノ二  
 印刷人 佐藤忠義  
 東京市芝區芝公園第十四號地九番  
 發行所 眞生社

(大正十四年八月十三日) 昭和二年十二月廿九日印刷納本 (毎月一回十二日發行) 第七卷第一號  
 第三種郵便物認可 昭和三年一月一日發行